〈研究論文6〉

古代東西の言語観

——アプローチのための基礎作業——

松村　恒

人類の思想が、その思想の担い手である各思想家の用いている言語の個別的言語形式によって制約を受け得るものであるか、という古来からの大問題は暫く措くとしても、自己の用いた個別的言語、更にはその背後に想定される普遍的一般的言語への反省観察が、思想史上の重要な一部門を形成していたことは疑うを得ない。そこで古代人の言語研究の跡を探ると、そこに我々が予期する以上に精密な観察がなされていることに驚嘆する一方、今日の眼から見れば甚だ稚拙な手順を見出すこともある。しかしそこに却って今日の我々が見失いがちな素朴ではあるが、根源的基本的な問いかけを見出すことがある。また古代人的アプローチは時として現代の我々の容易な理解を拒むことがある。その様な場合に、類似のテーマを有する古代人の言語論同士を対峙させ、共通点相違点を明らかにすることによって、古代人的思考方法へ接近するためのヒントを得ることもできよう。

標題に「古代東西」と記してあるが、実際に言及するのは、インドとギリシアのみである。その理由は、それぞれが東西を代表するのに相応しい内容を有していることもあるが、また単に筆者個人がそれぞれに近づき易かったという事情もある。

今日 School Grammar と呼ばれるものの淵源は古代ギリシアに迄遡る。我国でも明治期に英文法を輸入して以来、自国語の文法すらもそれに則って編まれた程であったから、正負両面を含めて今日迄 School Grammar の影響は甚大である。この点で古代ギリシアの言語論は重要な意義を有するものであるが、抑古代ギリシアにあっては言語学もしくは文法学は独立の学問領域ではなく、他の諸科学と同じく哲学者達の関心対象であった。アレクサンドレイア時代になるに至り、文献学者達が自らの補助学科とし

て認定した感はあるが、古代ギリシアの哲学者にして言語に対して何らかの反省を加えないものは極めて少なく、従って言語論は古代ギリシア思想史上大きな一部門を占めていたといえよう。

以上とは別箇にしかもより早い時期に、極めて優れた言語への考察が行われたのが古代インドである。インドの場合も、聖典を正しく伝承するための補助学科として発達してきたのであって、当初から言語学または言語哲学が独立の学問領域であったのではない。

これらギリシアとインドの言語論言語認識は平行的に発展を遂げていったが、勿論同一の起源を有する訳ではなく、相互に干渉し合った形跡も今のところ認められない。従って両者を対比させるといったことは、同系統であることを前提とする比較言語学の《比較》とは大いに意味を異にしている。言語学で言えばタイポロジーといった分野により近いかもしれない。

今回は言語ユニットの設定の問題のみしか扱わないが、こういった個別的問題の研究の集積を経て、将来の包括的な見通しを確立せんがための基礎作業の一つとなることを希うものである。

一・一　stoicheîon

元来 stoicheîon の語は、哲学の術語即ち物質の構成要素の意味で用いられていたものが、文法の方にも使われてきたものと思われる。タレースの「水」がそうであり（DK 11A12=Arist. Metaph. A 3. 983b6=KR 87）、アナクシマンドロスの「無限なるもの」（tò ápeiron）（DK 12A9=Simplic. Phys. 24. 13=KR 103A）等々がそうであった。文字即ちアルファベットはフェニキア系より借用して、かなり早い段階より使用されていた。文字は grámma と呼ばれたが、音標文字のため音の要素即ち単音たる stoicheîon とかなり一致しており、同一の様に扱われることもあった（e.g. Pl. Cra. 431e）[1]が、完全に等価と見做されていなかったことは、Pl. Tht. 201e—204a に現われる表現、特に「文字のストイケイオン」（tà tôn grammátōn stoicheîa）（ibid. 202e）といった句により確かめられる。アリストテレースも同じ線上にあり、Metaph. VII. 17, 1041b32[2]では stoicheîon を質料因の例として、それより上位のレベルにある syllabḗ に対峙させて挙げてある。Arist. Poet. XX, 1456b では、素朴な形ではあるが初めて stoicheîon を正面から定義し、且つ分類を試みている。

ストイケイオンとは、もはや分割できない音のことであり、そのすべてではないが、その一つから意味のある音がつくりだされるものである。というのも、動物によっても分割できない音が発せられるが、それは私がストイケイオンと呼ぶものではない。この音は更に phōnḗen hēmíphōnon áphōnon に下位区分される。

尚後述（二・一）する様にこの『ポエティカ』は、第二十章に限り挿入の可能性が極めて強いので、Arist. の名をはずして、単に

Poet. XX として言及するのが適当である。

ゼーノーンに代表されるストアー学派は、それ以前の言語観を継承発展させつつ、アレクサンドレイアの文献学者へとつなぐ役割を果したのであったが、grámma と stoicheîon の関係を明確にした以外に音分類に関しては、在来の説をそのまま受け継いだに過ぎない（Diog. Laert. VII. 56—57）[3]。

以上すべてを文法プロパー[4]のものにまとめあげたのが、アレクサンドレイア学派の Dionysius Thrax である。その著『文法術』の §6 perì stoicheíou の内容を表解すれば、末尾の「表」の通りである。

表解すれば容易に理解できることであるが、diplâ の設定により、grámma と stoicheîon とを完全に峻別し、psilá daséa mésa という分類をしていることにより、彼が《音声的に均衡な体系》というものに気付いていたことが知られる。ただ問題となるのは、ă/ā を一括して a と把握している一方、ĕ/ē, ŏ/ō を一括せず別に配列していることである。やはり grámma からの制約から脱し切れず、完全な体系化に迄到らなかったと言えよう。それでは Dionysius Thrax は ĕ/ē 等を一括すべきであったのか、それとも a を ă と ā とに分割すべきであったのであろうか。これについては Sextus Empiricus の論難が参考になる。

もし a がそれ自体のまま長くなったり短くなったりしても、別のストイケイオンではなく、一つの共通の〔ストイケイオン〕である。同様に i y もそうである。そこで ē と ē とは、同一なる共通の音色（dýnamis）により一つのストイケイオンである、ということになろう。というのも、どちらの場合にも同じ音色があるからである。ē が短くなれば ē になり、ē が長くなれば e になる。……文法家達は七つの母音があると言うが、実際にはたった五つしかないのである。（Math. I. 115）

古代ギリシアの stoicheîon 分類にあっては、母音の長短は distinctive な特徴ではなかったのである。Dionysius Thrax は、その分類を完璧なものにするためには、異なる grámma で書かれる ĕ/ē, ŏ/ō をそれぞれ一括して配列すべきであったのである。

一・二 varṇa

varṇa とは Ṛg-veda 以来あゝ語で、元々は《階級・色》の意で用いられていたが（Grassmann, *Wb zum ṚV*, s.v.）、後に音声学の研究対象と見做される様になった。サンスクリットの土着研究家達も varṇa を示す諸リストを作製したが、それらのリストは必ずしも一様ではなかった。この varṇa に関しては、それ自体よりもむしろ《varṇa を共にしている》という意の sa-varṇa の概念をめぐって詳論されることが多かった[5]。この savarṇa を最も簡潔に表現したのが、「等しい口の調音努力が savarṇa である」（Pāṇ. I. 1. 19）という教示である。このスートラと同一線上にあるのが

VPr I. 43[6] であるが、これらを巡って註釈家達は夥しい論議を展開するのであるが、主要な点は、調音部位調音器官を等しくしていれば savarṇa であるということである。即ち a も ā もその音量の異なりにも拘わらず同一の varṇa を共有しているというのである。ここでの《口の調音努力》(āsya-prayatna) というのは、前述の Sextus Empiricus の《音色》(dýnamis) と正に対比されるものと言えよう。

この varṇa も stoicheîon と同じく、その音声観察に基づいて分類が行われた。原初的な分類は Chānd Up II. 22.5[7] に見られる svara ūṣman sparśa の三分法である。これは Poet. XX の phōnḗen hēmíphōnon áphōnon の三分法を想起させる。svara は、phōnḗen と全く同じ意の ghoṣavant という語でその属性が示される通り母音である。sparśa は鼻音をも含んだ閉鎖音の系列で、[8] áphōnon は鼻音を除いた閉鎖音の系列である。ūṣman と hēmíphōnon は、大体摩擦音により占められる。正確に言うなら、ūṣman には ṁ が、hēmíphōnon には鼻音と s を伴う二重子音が追加される。従って両者の分類法は、鼻音の点を除けば全く一致するのである。[9]

後になって別の分類法が出現する。RPr XIII. 6 (=M 716—720) がそれであり、閉鎖の具合を基準としている。即ち「この差は調音器官である」と述べて

非持続閉鎖 (sprstam asthitam)——閉鎖音
不完全閉鎖 (duḥsprstam)——y r l v
持続非閉鎖 (asprstaṁ sthitam)——母音 ṁ ūṣman[10]

と列挙する。ほぼ同様なのが CA I. 29—33 である。そこでの名称は少し違っていて、閉鎖 (sprsta)、軽い閉鎖 (īṣatsprsta)、開口 (vivṛta) となっている。CA では RPr XIII. 6 の冒頭の句に相当する「口中に調音器官の差がある」という条文は I. 18 に置かれ、19—25 で声門音 (kaṇṭhya)、軟口蓋音 (jihvāmūlīya)、硬口蓋音 (tālavyāna)、そり舌音 (mūrdhanya)、歯音 (dantya)、両唇音 (oṣṭhya) といった近代の文法書にも見られる調音部位に基づく分類を与え、26, 27 で nāsikya anunāsika を挙げ、28 で「repha の〔調音部位〕は歯茎である」と repha に言及する。この repha には問題が多く、その調音部位も「舌先」(VPr I. 77)、「歯茎もしくは歯茎の直後」(RPr I. 19—20)、「舌尖の真中で以って歯茎の後に於て」(TPr II. 41) と諸家の間にずれがあり、またソナント r̥ と関連して説かれることが多い。

rl̥ に於て rl̥ は a の聞こえを持つ組み合わされた一つの varṇa である。(VPr IV. 145)

r̥ は r と合成されている。(CA I. 37)

r は r̥ に於て後続〔母音〕の最初の半分にあるがこれは他より短いか、或はそうではない。この [r] は [r̥ の] 真中にある。(RPr XIII. 14=M742)

これらに VPr IV. 146 をも考え合わせて Weber 式に記すと、

$\mathrm{r}=\frac{\mathrm{a}}{4}+\frac{\mathrm{r}}{2}+\frac{\mathrm{a}}{4}$ となろう。[11] 立ち上がりに舌を持ち上げてゆく際、弱まった母音が調音上入るのは、音声学上よく認められる現象である。[12]

以上の様に ı と共に母音的働きをするソナント r が K. Brugmann を初めとする Junggrammatiker を待たずに既に観察されていたのである。

二・一　syllabé

stoicheion より一つ上位のレベルのユニットとして考えられていたのが、syllabé であった。この語も元々は《まとめるもの、束ねるもの》という意であった (Aesch. Supp. 457)。[13] 言語に関して用いられても当初は《文字のつながり》の意味であった (Aesch. Sept. 465)。[14] が、syl-lambánō の受動形の方から《音節》的な意味が派生してきたらしい (Liddell-Scott, s. v.)。プラトーンあたりになると stoicheion の上位レベルの概念として定着してくる (Pl. Tht. 203e, Cra. 424e)。[15][16] また phōnēen が syllabé の核になること (Pl. Soph. 253a)、[17] 認知され得る対象は stoicheion ではなく syllabé であること (Pl. Tht. 202b)[18] が、確定されてくる。

正面からの定義は、Poet. XX. 5, 1456b に見られる。

シュルラベーとは、響のないものと響を持つものとからまとめられた、意味のない聞こえである。

ここ迄は非常に正確であるが、次の一節は一見奇妙で、古来から校訂者達を悩ませてきたところでもある。本文は「A を伴わない GR は syllabé であり、A を伴った GRA もそうである」とあり、これに対して、「R を伴わない GR は syllabé ではないが、A を伴うものはそうである」とか、「R を伴わない GA は syllabé であり、R を伴うものもそうである」や、「GR を伴わない A は syllabé であり、GR を伴うものもそうである」といった本文改訂案の他に更には、アラビア語訳に基づいた「A を伴わない G と R は syllabé を作らない。A を伴い初めて syllabé となる」という解釈が呈示されているが、いずれも現存のテクストに attest されるものではない。もう一度立ち戻って syllabé の定義を見ると、phōnēn échōn (響を持つもの) とは phōnēen ではなく、非áphōnon (響のないもの以外のもの) 即ち phōnēen と hēmíphōnon とから成るものである。従って R は響を持つものであり、GR は syllabé であると考えて差支えない。これも一・二に述べた r/ı の問題に照らしてみれば、r は常にソナント的に機能する可能性を有していたことは明らかで、インドでは r/ṛ に文字の区別もあったが、文字上の区別のないギリシアでも同様なことが感ぜられていたのかもしれない。

尚この syllabé の問題に関連して、Poet. XX の挿入性が確かめられるかもしれない。アリストテレースの真作と認められる Metaph. 中の syllabé 論[19] と比較してみよう。Metaph. では syllabé は stoicheion を質料因としているが (VII. 17, 1041b32)、[20] 単に

それらが並列集合したものではなく、何かある別のものである(VII. 17, 1041b11)[21]という。この点は他の箇処でも言及されている様に(V.3, 1014a26; XII. 4, 1070b2)[22]強調事項であるが、Poet. XX の方はこの点には触れていない。また GR は KS PS Z と同じく二重子音であり、一つの文字で表わすことも〔それを表わす文字を造りさえすれば〕可能である(XIV.6, 1093a20)[23]とする。Z については、S と D から成るという説と、知られていない何か別の音であるという説の二つが紹介されているが(IX. 35, 993a1)[24]、Arist. は前者を採っているのである。従って GR は他の二重子音と同様に、syllabḗ とは考えていない様である[25]。この様に Metaph. の syllabḗ 論と Poet. XX のそれの間には微妙なずれを見て取ることができ、挿入説支持の一端を担い得るものかもしれない。

ここまでの syllabḗ は、その語自体の語源にも合うべく、結合されたものが定義の対象であって、単一の母音はここから洩れていた。ここに単一の母音をも付加して、近代の《音節》の意味に近づけたのが Dionysius Thrax である。

シュルラベーは正しく言えば、諸子音(sýmphōnon)と母音(phōnḗen)もしくは諸母音と結合したものである。例えば kar bous。また〔本来的には〕誤ってはいるが、一つの母音から成るものも〔シュルラベーである〕。例えば a ē。(§7)

術語の語源、また先学の意見と異なるので、「誤って」と断わり乍らも、母音を核とする音節観への前進は評価されねばならない。

二・二 akṣara

インドに於いては akṣara の概念はかなり明確で[27]、近代の音節の概念とほぼ一致している。Poet. 延いては Diony. Thrax でも syllabḗ が子音の方を中心にして捉えられる傾向があるのに対し、インドでは母音が中心である。

母音(svara)がアクシャラである。(CA I.93=VPr I.99)

子音を伴った、ṁ を伴った、あるいは純粋の母音がアクシャラである。子音は後続する母音のみに所属する。但し語末の子音は先行する母音に所属する。(RPr XVIII.17=[M1033—51])

RPr のこの教えの後半部と I. 15 とを考えあわせて見れば、開音節閉音節の区別も既に充分意識されていたことがわかる。

ṁ と子音は音節の肢分である。母音間の子音は後続する母音に所属し、ṁ は先行する母音に所属するが、子音連続の最初の子音は先行母音に所属してもよい。連続した同一の二子音も先行母音に所属してよい。(RPr I.15 [M23—27])

この様にギリシアに比べて音節の概念が明確なのは、韻律に関係があるかもしれない。というのも hexametre で綴られるギリシアの詩、例えばホメーロスでは

—∪∪—∪∪—∪∪—∪∪—∪∪— —

の daktylos の foot に荘重な響きを持たせるために、— — が続く場合が多い。つまり∪∪は—に置き換えが可能で、一行全

体の音量が基本となっている。一方インドの場合には、metrical scheme は長短の配列の具合によって決まる様に数が基本になっている。従ってその数を勘定するのに音節が意識されたのである。[28]

ガーヤトリー、ウシュニフ、アヌシュトゥブ、ブリハティー、パンクティ、トリシュトゥブ、ジャガティーのこれらはプラジャーパティの七つの韻律である。八アクシャラから始まって、段々に四つずつ増えてゆく。神の七つとまたアスラの七つもある。(RPr XVI.1—2 [=M861—4])

聖仙の韻律ガーヤトリーそれは二十四アクシャラから成る。八アクシャラが三行、或は六アクシャラが四行である。(RPr XVI.9 [=M874—5])

この様にアクシャラは最基本にして不滅のものと考えられたので、文字通りの語源解釈が生じるのである。

アクシャラは消えず、また尽きることがない。(そこには)不滅があり、ことばの車軸とも言われている。(Nirukta XIII. 12)

三

以上音素と音節に相当すると思われるもののみを考察してきた。いずれも個々の点で非常に問題の多いところであり、細部を無視した画一的な把握は危険である。しかし本稿の狙いは個別研究ではなく、むしろ各語派の土着の捉え方の最も基本となっているところにかなりの許容度をもって迫り、そこに存する共通性一般性を認めんとすることにある。従って個別研究の面では多くの問題が残されたままになろうが、それらの捨象も比較へ向う途の一つであろう。ともあれ、言語ユニットの設定方法に程度の差こそあれ、共通性一般性が見て取れた。これは人類の言語に対するアプローチの一般性ということと共に、更に突き進めば、人類の言語に遍在する一般性にも接近可能を示唆するかもしれない。

(1) 「これらの文字を、つまりaとかbといった一つ一つのストイケイオンを文法術によってオノマに与えてゆく時、もし何か取り除いたり、付け加えたり、何らかの変更を加えたなら、我々によりオノマは書かれてはいるが(*)、正しく書かれているのではない。というより全然書かれてはいない。もしそんなことを被ったら、たちまちに別のものになってしまう」の(*)の箇処を、Bekker は否定辞のconjectural addition をなして「オノマは書かれていない」とするが、以下の表現と重複し、文のスムースな流れを妨げる。

(2) 「ストイケイオンとは、分割されてそれになるものの中に質料として存在するものである。例えば、シュルラベーに対してのaやbがそうである。」

(3) 「ことばのストイケイオンは二十四文字である。ところで文字には三つのレベルがある。即ち(1)ストイケイオン〔の本質〕、(2)ストイケイオンの〔外形上の〕特徴、(3)アルファといった様な名称、である。phōnēen はストイケイオンのうち七つ a e ē i o y ō である。aphōnon は六つ b g d k p t である。」残りのストイケイオンは一括されて、恐らくは Poet. XX と同じ術語で hēmiphōnon とされていたのであろう。ch ph th が k p t と同じカテゴリーに分類されるのは、Diony. Thrax を待たねばならなかったから、

Poet. XX での áphōnon を k g t d p b ch th ph とするのは (D. W. Lucas, *Arist. Poetics* (Oxford, 1968; rpt. with corrections 1972), p. 200)、不適である。また「áphōnon と phōnêen を〔組合して〕シュルラブーとなす文字の知識を人々のために私は発明した」(Eur. Palamedes, fr. 578) を古えの二分法の根拠とするのも (*ibid.*, p. 199)、妥当ではない。Diog. Laert. VII でも三分法であるのに二つしか言及されていないし、語学的に厳密を期さない様な場合、「子音と母音とで」などと言っていろいろな半母音を列挙しないことがよくある様なものである。尚 ch ph th が aspiration の故に摩擦音などと同じ類別をされたことについては、H. Steinthal, *Geschichte der Sprachwissenschaft bei den Griechen und Römern* (Berlin, 1891²), S. 293

(4) 文法に独立の地位を与えた功績は大きすぎるであり、従来の説を踏襲している点が多いとして不当に低く評価する (J. Wackernagel, *Vorlesungen über Sytax* (Basle, 1920—24), Bd. I, S. 16) のは適当でない。Diony. Thrax 全般にわたる妥当な評価は、R. H. Robins, "Dionysius Thrax and the Western Grammatical Tradition," *TPS* (1957), pp. 67—106

(5) cf. P. Thieme, "Bhāṣya zu vārttika 5 zu Pāṇini 1.1.9 und seine einheimischen Erklärer," *NGWG*, phil.-hist. Kl. n. F. 1.5, S. 171—216=J. F. Staal, *A Reader on the Skt Grammarians* (Cambridge, Mass., 1972), pp. 299—332. M. Deshpande, *Critical Studies in Indian Grammarians I : The Theory of Homogeneity* [*sāvarnya*] (Ann Arbor, 1975).

(6) 「等しい調音部位と調音器官の口の調音努力が savarṇa である。」

(7) 「あらゆる svara は響を持ち力強く言われねばならぬ。『インドラに力を与えん』と（いう考えをもって）。あらゆる ūsman は飲んではいけない、除外してはいけない、開いて言われねばならぬ。『プラジャーパティに自らを捧げん』と。すべての sparśa は僅かに触れて交雑せずに言われねばならぬ。『死から自らを救わん』と。」

(8) cf. RPr I. 78; TPr I. 7.

(9) Poet. XX は三区分を説明して「phōnêen とは、prosbolḗ のない、聞こえる響を持つもの。hēmíphōnon とは、prosbolḗ があり、聞こえる響を持つもの、例えば S とか R。áphōnon とは、prosbolḗ があり、それ自身による響を何ら持たず、何か響を持つものを伴うと聞こえる様になるもの、例えば G とか D」とあるが、ここに見られる prosbolḗ の語は解釈が一定していない。即ち「他の音の添加」(I. Bywater, *Arist. on the Art of Poetry* (Oxford, 1909); W. H. Fyfe, *Arist. XXIII*, Loeb 199 (London, 1927; rev. 1932); 松浦嘉一訳『詩学』(岩波書店、昭和二四)) と「調音器官の接触」(J. Vahlen, *Arist. de arte poetica liber*, 3rd ed. (Leipzig, 1885; rpt. Olms, 1964); S. H. Butcher, Arist.'s Theory of Poetry and Fine Art, 4th ed. (London, 1911; rpt. Dover, 1951); Lucas, *op. cit.*, p. 200; 高橋正規『文法史——ギリシア時代』(大阪：ビジネス・リサーチ、昭和五四) pp. 101—2) の二様に訳され、恐らくはその淵源と思われるラテン語訳とアラビア語訳が、それぞれ前者と後者の立場を採っているらしい。ここでインドの三分法と連関させて考えてみると、sparśa に相応する発想が充分に予想され、また最後文の文勢にも合致するので、後者が支持される (see also W. S. Allen, *Phonetics in Ancient India* (London, 1953) p. 29)

(10) RPr はこの直後に「或る人達は、喉の ūsman には持続はない〔と主張する〕」と続ける。この文の明確な理解は容易ではない。Uvaṭa 註も「或る先生方は、喉の ūsman 即ち h と ḥ には非閉鎖 (!) の調音はない」とお考えになっている。つまり閉鎖か不完全閉鎖ということになる。以上が或る人達の意見である。また別の人

達は、〈喉の音以外の（ūsman には）〉と読む。」この註解の中で次の二点が指摘されている。《持続》と《非閉鎖》が等値であること、本文の「喉の」（kaṇṭhyasya）は「非喉の」（'kaṇṭhyasya）とも読み得ることである。否定辞a-を省略したマークのアヴァグラハは通常写本では記されない。先ず第一の問題であるが、本文は持続性の否定つまり《非持続非閉鎖》を主張しているのかもしれない。もしそうであれば、これは Uvaṭa の誤りである。その場合「ある人達は」四分法を提唱していることになるが、後代のシクシャーの段階になると四分法がよく見られる。例えば Āpiśali-śikṣā III では、閉鎖（spṛṣṭa）、準閉鎖（īṣat-spṛṣṭa）、準開口（īṣat-vivṛta）、開口（vivṛta）となる（cf. Allen, *op. cit.*, pp.25—6）。各類の音の内容は必ずしも明瞭ではないが、母音・歯擦音・h・ṁ の音群を開口度で分けるとすれば、〈母音・h・ṁ〉と〈歯擦音〉の区分になる可能性が強い。つまり〈歯擦音〉即ち〈非喉音の ūsman〉が別立される必然性があった訳である。この推測が正しければ、RPr 本文は「別の人達」の様に「喉の音以外の」と読むのが適当であることとなる。

(11) Whitney が Weber の見解として引いたものであるが（W. D. Whitney, "The Atharva-veda Prātiśākhya," *JAOS* 7(1862)＝ChSSt 20 (Varanasi, 1962), p. 33）、Weber 自身は $\overset{a}{4}\,r\,\overset{a}{4}$ と書いている。（A. Weber, *IS* 4 (Berlin, 1858; rpt. Olms, 1973), S. 261）、勿論前者の様に直すのがよい。

(12) cf. M. Grammont, *Traité de phonétique* (Paris, 1933; 9 ème éd., 1971), p. 361.

(13) 「私は胸ひもと帯を持っている。即ち衣を束ねるものを。」

(14) 「重装兵が……（敵の砦を）破壊せんと望みつつ、グランマのまとめられたるものに於いて叫んでいる。」

(15) 「多分シュルラベーはストイケイオンではなく、ストイケイオンから生起した一つの概念であるけれど、それ自体一つの形態を持っているストイケイオンとは別の種類のものとすべきだったのだろう。」

(16) 「……必要と思われる時には、〔諸ストイケイオンを〕共にしてシュルラベーと呼ばれている通りのものをつくり、更にシュルラベーを組み合わせて、そこからオノマやレーマが構成される。」

(17) 「ところでポーネーエンは他のものに比べると異なっていて紐の様にすべてを貫いている。その結果〔ポーネーエン〕のどれかがなくては、一つの〔子音〕が別の一つの〔子音〕と結びつくことができない。」

(18) 「この様にストイケイオンはロゴスでもなく認知されるものでもなく、〔ただ〕知覚されるもの〔に過ぎない〕。一方シュルラベーは認知されるものであり言われるものであり、真実の思いによって思われるものである。」

(19) Metaph. の出典箇処については、高塚、前掲書 pp. 98—99 に負うところが多い。

(20) 註（2）参照。

(21) 「シュルラベーは〔複数の〕ストイケイオンではない。ba は b と a とではない。肉が火と土とではないのと同じである。……つまりシュルラベーは何かあるものである。単にポーネーエンとアポーノンといったストイケイオン〔の連続〕ではなく、何かある別のものである。」

(22) 「音のストイケイオンとは、音がそれから構成されているものであり、究極的にはそれへ分解されるものである。そしてそれはもはや形相上それ自身と異なる別の音には〔分解され〕ない。ストイケイオンは分解されても、その部分は全体と同じである。例えば水の部分は水であるが、シュルラベーの〔部分はシュルラベーでは〕ない。」

(23)「メトイケイオンのうちそえたものが、メトイケイオンから構成されているものと等しくはない。例えばBもしくはAはBAと等しくはない。」

(24)「彼らは、KS PS Zは協和音である、それらは三つあるから〔二重子音は〕三つであると言う。無数にあり得るということが無視されている。というのもGRにも単一の表記があり得るから。」

(25)「ある種のシュルティーの場合の様に意見が対立するであろう。〔例えば〕或る人達はzaはsとdとaとから成ると言うが、別の人達は別の音で知られていないものだと言う。」

(26) それではMetaph.でsyllabêの一例として挙げられたZAは、Poet. XXではどうなるのであろうか。syllabê成立の要件はáphōnon と phōnēn échōn であった。Aが後者であることは明らかである、Zも Poet. XX のなかでは明確ではないが、ヘーメーンからして hēmíphōnon 即ち phōnēn échōn ということになる(註(3)参照)。従って要件の一つ áphōnon が満たされていないので、syllabê とはなりえない。もっともZはSとDから成るという説(註(25)参照)を受け入れれば、Dが áphōnon であるのでsyllabê となりうる。それでもSAという場合には依然として syllabê になり得ず、近代の音節概念に近づくためには、Diony. Thrax を待たねばならなかった。

(27) 祭式の文脈での aksara の発展については、J.A.B. van Buitenen, "Aksara," *JAOS* 79 (1959), pp. 176—187.

(28) *ibid.*, p. 186

〔略号〕CA: Caturādhyāyikā [see n. 11]. Chānd Up: Chāndogya-upaniṣad. DK: H. Diels-W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 5th, 6th snd 7th eds., (Berlin, 1934—54). IS: Indische Studien: Beiträge für die Kunde des indischen Alterthums. JAOS: Journal of the American Oriental Society. KR: G. S. Kirk & J. E. Raven, The Presocratic Philosophers: a critical history with a selection of texts (Cambridge, 1957; rpt. with corrections 1960). M: F. Max Müller, *Rig-veda-pratisakhya, das älteste Lehrbuch der vedischen Phonetik* (Leipzig, 1869). NGWG: Nachrichten von der Gesellschaft der Wissenschaften zu Göt-tingen. RPr: Ṛk-prātiśākhya [V. K. Varmā, *Uvata-bhāsya-sahitam Ṛgveda-prātiśākhyam* (Varanasi, 1970)]. Pāṇ:Pāṇini [O. Böhtlingk, *Pâṇini's Grammatik* (Leipzig, 1887; rpt. Olms, 1964)]. TPr; Taittirīya-prātiśākhya [W.D. Whitney, "The Tâittiriya-Prâtiçâkhya with its Commentary, the Tribhâshyaratna, "*JAOS* 9 (1871), pp. 1—469 = (Delhi, 1973)]. TPS: Transactions of the Philological Society. VPr: Vāja-saneyi-prātiśākhya [see n. 11]. その他の略号は、N. G. L. Hammond and H. H. Sucllard, eds., *The Oxford Classical Dictionary*, 2nd ed. (Oxford, 1970), pp. ix—xxii に従う。

〔付記〕本稿執筆にあたり、蔵書を貸与された朱友松田道郎助教授と、御著書を恵贈下された高塚正規教授に、深く謝意を表する次第である。

φωνήεντα
- μακρά …… η ω
- βράχεα …… ε ο
- δίχρονα …… α ι υ

δίφθογγοι …… αι αυ ει ευ οι ου

σύμφωνα
- ἡμίφωνα …… ζ ξ ψ λ μ ν ρ σ
- ἄφωνα …… β γ δ κ π τ θ φ χ

ψιλά …… κ π τ

δασέα …… θ φ χ

μέσα …… β γ δ

διπλᾶ
- ζ = σ + δ
- ξ = κ + σ
- ψ = π + σ

ἀμετάβολα = ὑγρά …… λ μ ν ρ

（まつむら・ひさし、比較文化・サンスクリット文献学、四天王寺国際仏教大学専任講師）